国際おきなわ
KOKUSAI OKINAWA

2012
No.57

OKINAWA INTERNATIONAL EXCHENGE & HUMAN RESOURCES DEVELOPMENT FOUNDATION

CONTENTS

■平成２４年度医療通訳ボランティア養成講座
■平成２４年度ウチナーンチュ子弟留学生受入事業
■「教職の学生の国際理解・国際交流に期待する」寄稿文
■平成２４年度国際交流員学校派遣事業
■日本語読み書き教室
■「国際交流は沖縄の宝」寄稿文
■「スポーツ分野での国際協力の意義」寄稿文
■平成２４年度基礎教育における格差対策のための教育行政強化

第３０回外国人による日本語弁論大会記念撮影

財団法人
沖縄県国際交流･人材育成財団

医療通訳ボランティア養成講座

経　緯

本講座は、沖縄県が策定した沖縄多文化共生推進指針を踏まえ、平成２２年度から（財）自治体国際化協会の助成を得て実施されています。沖縄県在住の外国籍の方々が、日常生活を営む上で、言葉のハンディー等を少しでも改善、支援するため最も身近で且つ重要と考え、医療期間の受診の際の医療通訳ボランティアの養成を行いました。

平成２２年度から２４年度に掛けて、８９名の受講者が当該講座を修了し、当財団のボランティアとして登録をしています。この３年間はボランティア通訳の養成につとめてまいりましたが、平成２５年度からは、県内医療機関等への周知を行い紹介事業を推進するべく、事業の開始に向けて整備を進めております。

県内医療機関等からは、既にボランティア紹介の要請があり、ボランティアの活動は始まっています。

毎回多くの参加者が集まり、熱心に講義に耳を傾けています

受講者の向学心及び ボランティア精神に対する評価

本講座は、１回４時間全９回の講座を受講後にボランティア通訳としての登録をしていただくことを条件に、会話は勿論のこと、希望する言語の読み書きが可能な受講者を対象としました。最初の講座から最後の講座までを受講し、修了証書を受ける方々は毎年受講申込者数の３分の１程度でした。講座日は、休日の土曜日・日曜日を設定しており、有職者の方でも受講できるようにしました。

講師には、医療現場のご多忙なドクターをはじめ、医療、保険に関する方々を招いたこともあり、皆出席の方のみ修了者とさせていただきました。

しかしながら、１回の講座が４時間という長時間は、主催をする担当者からしても決して安易にこなせるものではないと感じた次第です。登録者に対し、向学心を深く持ち合わせ、且つ、ボランティア精神を強く持った方々が全講座を修了されたものと心から敬意を表する次第です。

登録者の皆様には、新年度から県内様々な医療機関においてボランティアとして活躍されることを願っております。

医療機関等、 講師への積極的なご協力への感謝

本講座を開講するにあたり、県立南部医療センター・子供医療センター、県立中部病院、県病院事業局、全国健康保険協会等に講師の派遣依頼をしたところ、ご快諾を頂きましたことに感謝いたします。特に、医療現場の先生方には大変ご多忙の中、休日にも拘わらず、積極的に講師をお引き受けくださいましたことに心から感謝しております。受講者にとりまして医療に係る現場の状況、医療用語等目新しく、生々しく、ヒヤッ！とするような内容も多く、普段滅多に見聞することができない事項を多く学べた講座内容だったものと考えます。また、本講座をスタート時から今年度までつとめて頂いた総括のコーディネーター、講師兼コーディネーター、通訳技術の講師の先生方にも深く感謝を申し上げます。

今後とも皆様が、それぞれの分野でご活躍されますことを心から祈念いたしております。

平成２４年度講座概要

第１回講座「語学ボランティアのススメ、通訳技術」は、基礎的な通訳技術を学んだ後、ボランティアとはなんぞや！？といった講義・グループセッションを行いました。第２回から第８回講座までは各専門医師やスタッフを招いて、医療機関の仕組みや成人・小児外来の手順、ソーシャルワーカーの役割、総合医療の知識、小児科、産科、外科、内科、医療保険等の様々な講義を実施し、毎回各講義に応じたロールプレイやグループセッションを行い、全員参加型の内容としました。

最終の第８回講座では修了された受講者に対し、修了証書が授与され、当財団のボランティアとして３９名の方に登録をしていただいております。

JICA 研修員も協力し、様々な意見を交換します。

ボランティア登録者への協力の依頼、今後の活動への期待

休日の貴重なお時間を割いて本講座を受講され、在住外国人の支援のため、積極的に医療現場での通訳という多文化共生の役割を担っていただく登録者の皆様に感謝し、心から敬意を表する次第です。今後ともステップアップ講座、グループ研究会等で更なる医療通訳としての技術を高めて頂き、通訳・マニュアルやテキストの作成にも取り組んで頂きたくお願いいたします。

今後は、多くの機会に医療現場でのご活躍があるかと推察をいたしますが、ご自身のご健康にも充分ご配慮をされ、医療機関・財団との連携の下に、通訳としてご貢献賜りますことを切に願う次第です。

終わりに

我が国は、明治末期以来、戦前戦後を通して、多くの移住者を諸外国に輩出しましたが、それに対し、受け入れにつきましては、あまり積極的ではなかったものと思料いたします。現在、日本の企業が安価な労働力を求めて、アジア諸国に進出する一方、安価な賃金で雇用できる労働力の受け入れ等も並行して進めている状況にあります。併せて、県内においては、沖縄科学技術大学院大学の開校に伴い、多くの研究者、学生の来日や、外国人観光客の増加も見込まれていることから、更なる支援が必要になることが想定されます。

医療通訳はその一端に過ぎず、今後は福祉、災害、観光等多方面に渡る対応が必要になってくることが考えられます。行政、（県・市町村）、観光、国際交流・協力団体との連携を図り、対処する必要があることから、相互に更なる情報の共有化を深めて頂きたく願うものです。

（執筆者：国際交流課長　長濱　守毅）

３期生の修了式。今回は３９名の医療通訳ボランティアさんが誕生しました。

ウチナーンチュ子弟留学生受入事業

本事業は、平成２３年度まで「海外留学生受け入れ事業」として実施して参りましたが、平成２４年度からは事業内容を一部変更し、「ウチナーンチュ子弟留学生受入事業」として従来の受講可能科目の日本語・日本事情に加え、企業での研修や沖縄県の伝統芸能修得コース等を新たに追加し、事業を実施しております。

本年度も南北米、ヨーロッパの６カ国から９名の留学生を受け入れました。そのうち、県立名桜大学、県立芸術大学、沖縄大学、琉球大学において８名が日本語及び日本事情等を学んでいますが、１名は新たに開設した、沖縄県の伝統芸能修得コースで三線製作研修に参加しています。

今回は、この伝統芸能修得コースで学ぶ、県系３世で、アルゼンチン出身の奥間オマール・イグナシオさんの三線製作に架ける思いや、ご指導いただきました仲嶺三線店（在浦添市）の主宰者、仲嶺盛文氏、同様に那覇市で三線店を経営されているご子息の仲嶺幹様（沖縄県三線製作事業協同組合事務局長）に指導方針や製作の状況等を伺いました。

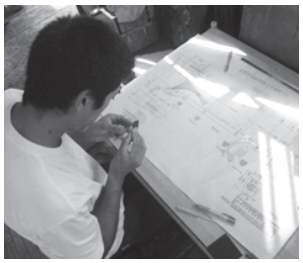
オマールさんは父親が大工の仕事をされていて、その手伝いの経験等を活かし、本コースに臨むこととなりました。アルゼンチンにおいても、県系人の方々で三線愛好家が多く、三線製作をする方もいる中、「ここ本場の沖縄県で、先生方からしっかり三線製作の基本を学び、将来アルゼンチンでも三線の製作や、修理等に取り組んでいきたいと思う。また、沖縄県の伝統文化の普及・継承に役立ちたい」と三線製作への熱い思いを話してくれました。

また先生曰く「三線製作は、（オマールさん自身が）趣味程度として考えているのか、それとも帰国後はプロとしてやっていきたいのか、本格的に取り組むのであれば、基礎的な製作台から電動ノコ・カンナまで危険な機械類の使用も必要に応じて指導したい。将来、沖縄県の支部のように活動を拡げていく気持ちはあるのか」などというお互いの話し合いの結果、オマールさんの「本格的に学びたい」という強い要望をかなえるため、先生もそれに応える指導方法を検討し、今回の研修が始まりました。

仲嶺三線店の研修現場を訪問した際、本人は図面の製作中で、細かい作業をこなしている様子でした。また仲嶺先生より、オマールさんは三線製作への強い意欲があり、手先も器用であるなど高評価をいただきました。一方、オマールさんからは、大変勉強になっており、とても、貴重な体験をすることができ、先生方に大変感謝していると話していました。

研修開始から約半年間の仲嶺先生からの研修報告書（前半期）によれば、三線蛇皮の下処理、人口革張り、三線の組み立て、棹造りから仕上げ、カラクイ製作と本皮張り（くさび張り）等の研修が実施されました。

去る、１１月９日～１１日まで開催された、沖縄県三線製作事業協同組合主催、「三線展示即売会」にオマールさんの作品も出展されていました。彼の三線は母国アルゼンチンの国旗をイメージした手の込んだ仕上げになっていました。残りの研修期間もオマールさんは引き続き「最後まで精力的に三線製作に取り組む」と真摯な態度で答えていました。



同三線店での図面の作成状況

仲嶺三線店での先生とツーショット

アルゼンチンをイメージした留学生オマールの三線

オマールの作品を手に展示即売会での仲嶺先生ご夫妻、幹さんと関係者

教職の学生の国際理解・国際交流に期待する

名桜大学人間健康学部教授　嘉納英明

私の勤めている名桜大学は、国内外の多くの大学と単位互換の協定を結び、学生交流はとても活発である。近年、学生の海外留学希望者も増加している。私の学生の頃と比べると、学生の海外への関心と実際の行動（留学数）は、雲泥の差である。兎に角、学生の海外志向は、顕著である。マスコミの報道では、日本の若者の「内向き」志向は強くなり、あえて海外へ踏み出さないという論調が多くみられるが、少なくとも私の周りの学生は、オーストラリア、アメリカ、韓国等に関心が高く、また中長期的な留学を果たしている。貧乏学生で一日も早く就職しなければならなかった私にとって、昨今の留学情報や条件の整った学生をみると、本当に羨ましい限りである。

私の場合、海外留学の経験はない。もちろん、海外旅行は何回かあるが。長期の海外研修を強いて挙げるとすると、平成 10 年度に文部省の若手教員の海外派遣研修で３ケ月、米国本土に行ったことだけである。当時、私は小学校の教師であった。このときバージニア州でホームステイしながら、学校見学や大学の授業参加、地域の社会福祉施設等を見学するものであったが、すべて強烈な印象として私の心に刻み込まれている（詳細は、拙著『アメリカ教育の光と影』沖縄時事出版、1999 年）。そして今でも、機会をとらえて、海外へ研修若しくは留学をしたいと考えている。また、４年程前にタイ研究者の学生引率に付いて行き、タイとミャンマーを周遊した。一週間程の現地実習であったが、軍事政権下のミャンマーの庶民の生活ぶりや経済状況を肌身で感じることができ、現地の聾唖学校訪問と僻地の学校の子どもとの交流は貴重な経験であった。教育諸条件の整った日本・沖縄で教育を受けた学生たちにとって、現地の厳しい条件下で健気に頑張っている子どもの姿は、強く記憶に残っているに違いない。

現在、海外留学は無理でも、数年前から、JICA 主催の研修会講師として来日してくる海外の文科省役員に対してレクチャーをしている（基礎教育研修における格差対策のための教育行政強化）。沖縄を含む日本の教育事情について講話をするのだが、これの準備はなかなか楽しい。途上国の教育政策の担当者等が受講生であり、日本の進んだ教育制度の内容よりも、近代以降の就学率や出席率の低迷した時代の明治政府や沖縄の取り組みに関心を寄せる受講生が多い。受講生のお国の教育事情と重ね合わせて聞いているのではないかと思う。沖縄にいて、海外（の方々）とつながるこの研修会は、私にとっては、貴重な国際理解・国際交流の機会である。

ところで、私は、大学では、教員免許状取得を目指す学生に教職科目を提供している。学生の中には、中学や高校の頃に海外へ留学した者もいて頼もしい。学生の海外への関心も高まっていることから、２年前に、教職履修の学生を引率して、台湾に向かった。台湾観光も楽しんだが、目的地は、台湾の日本人学校の訪問であった。日本人学校の授業参観、学校教師の講話を聞いて、海外においても、ひろく日本の教育活動が展開されていることに学生は興味津々であった。平成25年度の教職学びの旅は、韓国ソウルの日本人学校を訪問したいと考え、この３月に、事前調整するつもりで準備している。

これから教師を目指す学生は、内外の教育事情に関心を寄せ、その情報の中で日本や沖縄の教育を考え、位置づける作業が大切になってくるかと思う。多文化社会到来の時代で、多くの価値観・見方にふれ、その中で自分自身の見方・考え方を捉え直していくことが求められているものと考える。私も遅ればせながら、少しずつ学んでいきたいと思う。

ミャンマーの聾唖学校（2008 年９月）

国際交流員等の学校派遣事業

沖縄県の交流推進課に配属された国際交流員（C.I.R）、県費留学生並びに県内に在留する外国人等を県内の小学校や特別支援学校等に派遣し、それぞれの国の歴史や文化、概要等を児童・生徒へ紹介し、児童生徒の国際理解の促進を図っております。

また、児童・生徒からは沖縄の文化であるエイサー等の披露、色々なゲーム、ダンス等で持てなして頂き、相互の国際交流の場作りの契機にしております。

本事業は、平成７年度に開始以来、平成２３年度までに小学校１６７校、特別支援校等２０校に計８か国の国際交流員を派遣しております。派遣校等は、沖縄県教育委員会に推薦を頂いております。

派遣した何れの受け入れ校からも事業の高評を得ており、再度の受け入れの要望を頂いております。その様な視点で、当該事業は、本県の児童生徒はもとより、教育関係者とＣＩＲが友好に絆を深めるために一翼を担うものであり、今後ともレベルアップを図り、実施して参ります。

兼次小学校全学年生徒と共に記念撮影

アメリカの国際交流員からもらうクイズのご褒美（崎本部小学校）

日本語読み書き教室

沖縄県からは、明治の末期から戦前戦後をとおして、多くの移住者が北・中・南米へ移住者として雄飛いたしました。移住地において、ウチナーンチュの先人達は、汗と血にまみれ仕事に専念したそうです。同時にその子弟へ高い教育を受けさせ、各界に多くのプロフェッショナル（医者、歯科医、薬剤師、弁護士、公認会計士、実業家等）を輩出しました。近年、多くの子弟の一時来日、または永住が増加する傾向にあります。本県でも同様に多くの県系２世・３世が在住しています。移住先国では日本教育を受ける機会を逸し、来日後、日本語の会話はできるものの読み書きの知識がない方々が多く、教育機関、役所、金融機関等において支障をきたしていることからその支援のため、当財団では読み書き教室を開設し、県系人への受講を呼びかけております。

修了式の集合写真。仲村先生と渡真利先生も一緒に

県系子弟の皆様は、通常何らかの仕事についておられ、時間の調整が厳しいと言うことも伺っておりますが、可能な方々へは是非日本語教室の受講を勧めております。

本事業は、平成１６年度から開始し、平成２３年度までに１３か国１地域の出身者で１５８名が受講しております。

本事業は多文化共生の一環として実施する事業であり、今後とも子弟を中心に教室の継続を推進してまいります。

修了式後の世界各国料理味比べ

国際交流は沖縄の宝

㈲沖縄インターオーシャンサービス代表　与那城　昭広

日本復帰 40 周年を迎えた昨年。記念式典には南米各地の県人会会長が招待され、旧交を温めることができた。海外へ移住した県人会のリーダーたちとの出会いは 46 年前。以来南米に住む多くの県系人たちに関わってきた。

最後の移民船「日本丸」の出港した年に、現在代表を務める弊社に入社。まもなく南米最大のヴァリグ・ブラジル航空の参入で弊社が総代理店となり、移住者の往来も船から飛行機へ変わった。日本復帰が決まった当時の県人会の喜びは地元に住む我々の想いよりもはるかに大きく、復帰記念として天皇陛下が参加した海洋博覧会には多くの移住者が来沖。その際私は、参加者の日本旅券作成に必要な戸籍の請求の為に県内各市町村を巡り、戦災で焼失した戸籍作成に奔走した。この時来沖した南米各地のリーダーとの交流を通して、先駆者移民の過酷な実情やその中でも戦後間もない故郷の為に、援助活動をしていたことを理解した。特にブラジルは直接送金ができなくなっても、わざわざハワイ経由で送金していたという。また、復帰当時在伯沖縄県人会（現ブラジル沖縄県人会）会長をしていた屋比久孟清氏の故郷に対する想いが形となり、来沖していた博覧会参加者の協力も得て、那覇市役所側の県庁入口に復帰記念碑が建立されている。昨年の記念式典の際には現会長の与那嶺真次氏と共に記念碑の修復を行った。

こうした海外の移民一世リーダーたちの強い思いはその後母県との絆を深めていく礎となり、県費留学生の受入などが他県に先駆けて行われた。教育や経済界も巻き込んだ市町村レベルでの相互交流、各国での移住式典開催や各地における県人会館設立への援助など多方面においてその絆は深まり、世界ウチナーンチュ大会開催へと繋がっている。

こうした国際交流をより発展させていく為に、西銘県政において国際交流財団が設立され、奨学金や各地の交流事業推進の中心となってきた。この活動には県内にある各国交流団体も一役かい、未来ある若者たちの為に頑張っている。しかし、昨年の事業仕分けによって突如消滅の危機に直面し、海外の県人会をはじめ県内交流団体にとって、まさに晴天の霹靂であった。各市町村では、現在短期間だが子弟研修制度も実施しており、その成果が次世代へのアイデンティティーの継承やスキルアップに寄与している。コンピューター時代がもたらしたグローバル社会において、こうした留学経験は県系人が今後発展していく基礎となるだろう。国際交流なくして沖縄の未来はない。資源のない沖縄の生きる道は、移住国の大いなる資源、特に相互の人材交流を生かし、明るい将来を若者たちに託していくことである。今後の若者たちの国際交流は、基地経済からの脱却や経済発展の鍵となっていくだろう。今こそターニングポイントであると自覚しこうした交流事業を継続していけるよう、より一層の努力を要する。

昨年で 21 度目になるブラジル訪問で感じたことは、ブラジルにおいて中国資本が日系企業にも影響を及ぼしつつあることだ。しかし、現在ブラジルでは日系や県系の子弟が各界各層の中枢において活躍、成果をあげている。彼らの協力を得つつ、沖縄も官民一体となって次世代の人的・物的相互交流を個々のレベルで真剣に取り組む必要があるだろう。さらに 21 世紀の発展国であるブラジルでは、農業の分野において日系人の力がその発展に貢献している。日本において農業が第六次産業として位置づけられつつあるなか、沖縄もブラジル県系人との連帯・協力していけば、土地は狭くとも新たな経済発展に繋がる可能性が見出せるだろう。その為の人的資源となり得る若者の交流を途絶えさせてはならない。そしてあらゆる面での視察交流もまた同様に必要だ。私も半世紀近く県系人や交流事業に携わってきた経験を活かし、今後も沖縄や県系人の発展の為に力を注いでいきたい。

ブラジルの研修生帰国の見送り（空港にて）

スポーツ分野での国際協力の意義

ＪＩＣＡ沖縄　国内協力員　喜屋武　翔

インドの東側に、バングラデシュという小さな国がある。日本の４割ほどの面積の中に住んでいる人は１億5000万以上と言われている。どこに行っても人、人、人である。

私はそんな国の首都ダッカから北西に40キロほどのところにある国立スポーツ学院に、バスケットボール部のコーチとして派遣された。同学院ではサッカーやクリケットをはじめとした12種目の競技があり、生徒たちは全寮制の中で勉強をしながら朝練と午後練で汗を流す。普通の学校には部活動がないバングラデシュにおいては、同学院が国唯一のスポーツエリート養成学校であり、実際に多くの競技で同学院出身者が国代表に選出されている。

しかしバスケットボールに関しては入学時点ではほぼ全員が素人である。むしろほかの競技を志望して入学試験を受けた中で「背が高い」などの理由でスカウトされた「おこぼれ」の生徒たちが大半なのである。したがって入学後はまずバスケットボールのルールを覚え、興味を持ち、文字通り基礎技術を習得するところから始まる。それでも数年すれば国内大会で上位に食い込むチームになるのだが。

そんな中で私は何を教えるのか。バスケットボールの指導ももちろん大切だが、それ以上にバスケットボールを通して何を学ばせるか、ということを常に意識して活動していた。時間を守る、規則を守る、挨拶をする、相手を尊重する、目標を持って努力を続けるなど、私自身がスポーツを通して学んだこと、それをどうしても伝えたいと思った。そういう精神性を持った生徒であればどのような仕事に就いてもきっと成功できるだろう。バスケットのコーチとして派遣されながら、競技を辞めた後に何が残せるかを一番に考えていた。

しかし他の競技の生徒と比べても怠け者の多かったバスケット部。そこが最も欠けている部分であった。今振り返ってもほぼ毎日怒鳴り散らし、やる気のない生徒を帰すこともあれば、逆に「お前らなんかに教えても無駄だ」と言って練習中に私が帰ったこともあった。それも何度か。

それでも私が担当していた新入生たちに対しては目標を持って練習に取り組むこと、その目標を達成するために努力を続ける大切さを何度も話し続けた。また上手になりたい生徒に対してはいくらでも時間とエネルギーを割くということを伝え、練習中は生徒が理解するまで根気強く説明し、個人練習にも付き合った。

その結果、ゆっくりとではあるが確実に練習に取り組む姿勢が向上した。また練習前の自主練習が定着し、その時間を使ってシュートフォームの矯正やドリブルの反復練習などを行うようになった。30分前から１時間前になり時には２時間前に来ており、正直食後の休憩がほしいと思ったこともあった。上達のスピードは当然まちまちであったが、生徒たちが自分の意思で練習し、上手になっていくのを見られるのは喜びだった。

しかし残念ながら、任期中の国内外の大会では力が及ばずチームを優勝させることはできなかった。現地語のテキストを作成した以外は、おそらく私はこの２年間で形あるもの目に見える結果を何も残していない。

ただ、スポーツを通した国際協力は、技術の向上と同じもしくはそれ以上に精神面を成長させることが大きな意義のひとつであり、だからこそどこかのプロコーチでなく日本人ボランティアが派遣されていると考える。そういう意味では私が伝えたかったものは生徒の中に残すことができたと信じている。それが後輩たちにまで伝わり、スポーツだけでなくさまざまな分野で活躍してくれることを願う。

最後になるが、来年度から私は高校の教員として勤務することになる。そもそも協力隊を志望したきっかけのひとつが「これから外の世界に出ていくこどもたちを刺激できるだけの存在になりたい」というものであり、現地での２年間を終えて少しはそのような存在に近づけたと感じている。これからは自分の経験やそこで学び感じたことを沖縄の生徒たちに伝え、広い世界に飛び出す背中を押していきたい。

バングラデシュでの指導風景

平成２４年度「基礎教育における格差対策のための教育行政強化」コース

平成１９年度に「基礎教育における地域格差是正」コース名でスタートした本研修事業は、ＪＩＣＡが世界の開発途上国に対して国際協力事業の一環としての研修の機会を提供するものです。平成２２年度からは、標記の名称で、研修内容を更にレベルアップし、平成２４年度までの３年間実施をしております。（研修概要については、平成１９年度の第５２号で紹介済）。

研修の主たる内容として、日本・沖縄県の教育、第２次世界大戦後の廃燼（はいしん）の中から、教育の復興を辿った過程、本島と離島、へき地校の教育の格差是正、特別支援教育や平和教育等について、大学の教授・有識者の講義や小学校、中学校、特別支援学校等の教育関連機関訪問により学んでいただきました。

また、それぞれの研修員が抱える課題の分析、課題解決のための行動計画等を作成して頂きました。

毎年のごとく研修員からは、「戦後の沖縄県の教育の復興への迅速な県民の努力、逞しさに感動した」、「県内のへき地校の訪問の際、研修員の国々と比較した場合、“へき地校”とは言えない」、「特別支援教育等にも強い関心をもった、その主な理由は、日本の教育制度は、国民の全てに公平に教育を受ける権利が与えられている」というコメントが多く寄せられています。

またアフリカ、中東、アジア諸国の研修員にとって、本県での研修内容が全て目新しく貴重であり、自国で実施可能だと思われる内容は、積極的に取り込んで行きたいということでした。

それぞれ教育行政に携わる研修員の皆様が、本研修の成果を活かしていただき、自国の基礎教育の発展に貢献をしていただきたいと強く願うものであります。

講義の様子

豊見城中学校での学校訪問

研修を無事に終えて修了式を迎えました。

ご寄付をいただきました

去る１１月８日、北米カリフォルニア州在住の金城（きんじょう）武男（たけお）様より１，０００（米）ドルのご寄付を賜りました。平成１６年度、平成１７年度と今回を含め３度目で、計３，５００ドルのご寄付となります。また、いずれも前北米沖縄県人会長の当銘由洋様に託され、当財団に贈呈していただいたことを本誌でご報告いたします。

金城様は、沖縄県から北米へ移住され、多くの困難・苦渋を乗り越えてこられました。
また、独自の新聞「五大州」を発行され、多くの購読者に種々の情報をご提供なさっています。

経済事情の厳しい昨今、金城様の貴重なご寄付に対し、心から感謝申し上げ、今後のご健勝とご活躍を祈念いたします。

金城様のご寄付は当銘様より金武理事長に手渡されました。

金城武男様

沖縄県国際交流・人材育成財団賛助会員募集

沖縄県国際交流・人材育成財団では、我が国の南の玄関にふさわしい国際性豊かな活力ある沖縄県づくりをめざして、県民並びに企業団体の協力を得て国際交流・協力事業を推進しております。これらの事業の財源は、賛助会員の会費と基金の運用益等で賄われています。

国際交流・協力事業の活動趣旨に賛同される方を、会員として募集しており、どなたでも会員になれます。会員の方には、当財団及び県内国際交流団体の開催するイベントの情報紙「いちゃり場通信」、広報誌「国際おきなわ」等を無料で配布いたします。多くの皆様の入会を心からお待ちいたしております。

年会費：個人会費：　３，０００円、
　　団体会費：１０，０００円

【お申込・お問合せ】
（財）沖縄県国際交流・人材育成財団　国際交流課
（TEL.098-942-9215）
（FAX.098-942-9220）

H24 JICA フェスティバルにて